

# 西脇順三郎

Nishiwaki Junzaburo

1894(明治27)年、新潟県小千谷市生まれ。慶應義塾大学理財科卒。1920(大正9)年に慶應義塾大学の予科英語教員。1922(大正11)年にイギリス留学。同地で英文詩集『スペクトラム』(ケイム・プレス社、大正14年)刊。帰国後、慶應義塾大学文学部の教壇に立ち、めざましい執筆活動を開始。詩人・詩論家として日本のモダニズム運動の指導者と目される。1957(昭和32)年読売文学賞。エズラ・パウンドに発見され、ノーベル文学賞の候補者となる。1971(昭和46)年に文化功労者。1973(昭和48)年にアメリカン・アカデミー・オブ・アーツ・アンド・サイアンスの外国名誉会員。1982(昭和57)年没。享年88歳。



伊太利の第一夜の雨(リリアス社蔵) (西脇順三郎画) 小千谷市立図書館蔵

忽然たるアカシアの花よ！ 我はオドロコ  
ンを飲んだ。  
死よさらば！  
善良な継続性を有する金曜日、水管パイ  
プを捧げて眺望の方へ向かんとする時、橋の  
上より呼ぶものあれば非常に急ぎ足全部  
アムプロジアの上にもち上げる。すべては願  
である。人は願の如く完全にならんとする。  
安息する暇もなく微笑する額を天鵞絨の中  
に包む。  
コズメチックは解けて眼に入りたれば直ち  
に従僕を呼びたり。  
脳髄は塔からチキンカツレツに向つて永遠  
に戦慄する。やがて又我が頭部を杏子をもつ  
てた、くものあり、花瓶の表面にうつるもの  
がある。それは夕餐より帰りしビートルの踵。  
我これを憐れみをもつてみんとすれどもあま  
りにアマラントの眼である。  
来たらんか、火よ。

『Ambanalia』  
「無情なる火よ」より



第1回配本(2007年5月発売)  
ISBN978-4-7664-1371-7 定価(本体4,800円+税)

## 第I巻 詩集1

第2回配本(2007年6月発売)  
ISBN978-4-7664-1372-4 定価(本体4,800円+税)

## 第II巻 詩集2

第3回配本(2007年7月発売)  
ISBN978-4-7664-1373-1 定価(本体4,800円+税)

## 第III巻 翻訳詩集

第4回配本(2007年8月発売)  
ISBN978-4-7664-1374-8 定価(本体5,200円+税)

## 第IV巻 評論集1

第5回配本(2007年9月発売)  
ISBN978-4-7664-1375-5 定価(本体5,600円+税)

## 第V巻 評論集2

第6回配本(2007年10月発売)  
ISBN978-4-7664-1376-2 定価(本体4,800円+税)

## 第VI巻 随筆集

### 【お申込み方法】

○書店でお申込みの場合  
申込書にご記入の上、お近くの書店にお持ち下さい。

○弊社宛直接お申込みの場合  
申込書にご記入の上、ファックスまたは郵送で弊社宛にお送り下さい。この場合、各巻発売ごとに宅配便でお届けし、お支払いは、配達ごとに代金引換となります。配達時各回に書籍代に送料200円を加えた代金をお支払い下さい。当社ウェブサイトでもご注文いただけます。[www.keio-up.co.jp]

全6巻 合計 定価31,500円【本体30,000円】分売もいたします。



遠本・体裁  
四六判、上製、カバー装、本文13Q 1段組(第V巻のみ本文12Q 2段組)  
表紙——西脇順三郎 表紙——中島かほる

### 【申込書】

書店名	発行：慶應義塾大学出版会 TEL: 03-3451-3584 FAX: 03-3451-3122	●お名前
【この欄は書店が使用します。】	西脇順三郎コレクション 全6巻	●お電話
	全6巻[ ]セット	●ご住所
	第I巻[ ]部 第IV巻[ ]部	
	第II巻[ ]部 第V巻[ ]部	
	第III巻[ ]部 第VI巻[ ]部	

ご記入いただいた個人情報、ご注文いただいた書籍にかかわるご連絡等および新刊のご案内をお送りするために利用し、その目的以外での利用いたしません。

ご注文・お問合せ先

慶應義塾大学出版会  
〒108-8346 東京都港区三田2-19-30  
TEL 03-3451-3584 FAX 03-3451-3122 http://www.keio-up.co.jp

## 没後25年記念出版



窓(ボードレール)  
(西脇順三郎画、小千谷市立図書館蔵)

## 永遠のモダン

# 西脇順三郎 コレクション

全6巻  
新倉俊一【編】

今なお輝き続ける西脇順三郎の珠玉の詩、詩論、エッセイを精選

慶應義塾大学出版会

### 刊行のことは

【編者】  
新倉俊一

萩原朔太郎とともに日本の近代詩の源流である西脇順三郎が死んで、今年は25年目となる。

ポーの没後25年目に記念碑が建てられて、マラルメが有名な献詩をささげたように、本格的な評価が定まるのにふさわしい期間であろう。西脇順三郎の全集は生前から刊行されているが、しかし、いざ手にとって作品や評論を読もうとしても、1、2の文庫版しか見当たらない。広く読まれてこそ初めて「伝統」とは受け継がれていくも

の他にない。

詩集『Ambanalia』や『超現実主義詩論』や評論集『輪のある世界』を読んで、そのエスプリに感動した文学青年たちが多い。1957年にエズラ・パウンドに見出されて以来、海外でも関心が高まっている。この6冊の『西脇順三郎コレクション』の中に、「永遠のモダン」としてこの詩人・詩論家のエッセンスを凝縮した。多くの読者たちに改めて彼の真価を発見してほしい。

1931(昭和6)年頃、自宅で。  
(撮影：富本貞雄、小千谷市立図書館蔵)

偉大な名前

大江健三郎

(作家)

西脇さんとの不思議なご縁

佐伯彰一

(英文学者・文学評論家)

「日常」と「永遠」の散策者

那珂太郎

(詩人)

出発時に、二直線が交わるように近付き、それから限りなく背反することになった批評家が、英文科の大学院で西脇順三郎教授に嫌悪されたというゴシップは、私が生涯でただ一度励まされた文壇記事である。

メキシコシティで邦人研究者たちから悪評をこうむりつつ、ひたすらアパートに隠つてエラボレーションにとめた長編が評価をえられなかった一九七六年秋、一行書いたのみの葉書が届いた。

これからは諧謔の時代です。署名は、西脇順三郎！ それ以前も以後もお会いせぬまま。

自分の「後期レイトの仕事」に取りかかろうとして三年間、「Four Quarters」を読み続けた後、翻訳に教わる決心をして、柳瀬尚紀から（これは儀式であるから最良の媒介者が必要）西脇順三郎全集の訳詩の巻を借りた。そして始まった私の晩年の詩的幸福は、（終りの時まで）中だるみすることはないだろう。

私は講義を伺ったおぼえもなく、直接おあいするようになったのはかなり後年の話にすぎないが、不思議と身近さをおぼえて時には文壇のパーティの折などには熱っぽい議論をとりかわす事さえ起こってくれた。お弟子ともいえないのに奇縁という他ない。

おあいする度にますます親愛感が深まった。現代の若い読者にも稀代の学者詩人の生きた面目にふれてほしい。

私はふとした偶然のお蔭でこの世にも稀な、すぐれた西脇さんの感性に直接ふれる機会にめぐまれたこの幸運の一端を世の文学愛好家にも、と願わずにいられない。



西脇順三郎は詩人であり、それ以外の何者でもない。生前の西脇さん自身はさう言はれることを好まれなかったけれど、彼の随想エッセイなどは無論のこと、論文や評論詩論なども、すべて詩人のもものと見なければ十分にはわからないだろう。それは「理解」すべしでなく、「感応」するほかない。西脇の日本語脈は「論理」を超えて「直観」と「連想」によつて展開する独特の西脇スタイルをつくつてゐる。

とりわけ詩作品にあつては、固有の言語感覚によつて映像、色彩、音韻からの連想でしばしば飛躍し、非連続の連続を示す。そこに諧謔がうまれる。西脇は古今東西に亘り学殖豊富なことは紛れもないが、所謂「学者」ではなく、すべては「詩」の糧となるばかりである。

彼は日常の事物事象の中に「永遠」を見る。あるいは「永遠」からの垂直的光線によつてあらゆる日常の事物事象を蒼白化し、哀愁色に染めあげ、莊嚴する。その中を西脇は軽やかに散策してやまない無類の詩人だった。

全6巻 新倉俊一編

# 西脇順三郎コレクション

永遠のモダン



第2回配本(2007年6月発売) 430頁

## 第II巻 詩集2

『第三の神話』1956年  
『失われた時』1960年  
『豊饒の女神』1962年  
『えてるにたす』1962年  
『宝石の眠り』1979年

【解説】藤富保男  
【回想の西脇順三郎】おゝ、ポボー!——池田満寿夫

第4回配本(2007年8月発売) 462頁

## 第IV巻 評論集1

『超現実主義詩論』1929年  
『シュルレアリスム文学論』1930年  
『輪のある世界』1933年  
『純粹な鶯』1934年

【解説】林少陽  
【回想の西脇順三郎】オックスフォードにて——阿部良雄

第6回配本(2007年10月発売) 360頁

## 第VI巻 随筆集

『メモリとヴァイジョン』ほか。

【解説】八木幹夫  
【回想の西脇順三郎】西脇順三郎アラベスク——吉岡実

西脇順三郎書誌・略年譜 [新倉俊一編]  
編集後記(全巻解説) [新倉俊一]



カット 西脇順三郎

第1回配本(2007年5月発売) 430頁

## 第I巻 詩集1

『Ambarvalia』1933年  
『旅人かへらず』1947年  
『近代の寓話』1953年

【解説】井上輝夫  
【回想の西脇順三郎】西脇さんと私——瀧口修造



第3回配本(2007年7月発売) 365頁

## 第III巻 翻訳詩集

『ヂオイス詩集』1933年  
エリオット『荒地』1952年  
エリオット『四つの四重奏曲』1968年  
マラルメ『詩集』1969年

【解説】城戸朱理  
【回想の西脇順三郎】西脇先生と言語学と私——井筒俊彦

第5回配本(2007年9月発売) 600頁

## 第V巻 評論集2

『ヨーロッパ文学』1933年

【解説】巽孝之  
【回想の西脇順三郎】西脇順三郎とフランス文学——佐藤朔

学匠詩人

西村太良

(随筆家)

西脇順三郎とイタリヤ

メアリ・ドウ・ラケウिल्ツ

(詩人)

西脇順三郎の歩行が遙かに遠くなるうとして

吉増剛造

(詩人)

学匠詩人という言葉は恐らくヘレニズム時代のカリマコスあたりについて使われ始めたものと思われる。一方わが国でも長く歌学者が歌人を兼ねるといふ伝統があった。西脇順三郎と折口信夫は、このいずれの意味とも異なるが、やはり独特の形で近代を代表する学匠詩人だったといえるだろう。特に西脇順三郎の場合、西洋文明の古典受容の最後の果実を、いま思えば極めて日本的なやり方で自家葉籠中の物とした稀有な例ではないだろうか。学識に自在に遊びながら、人工的な叙情によつて組み立てられた知的迷宮は、いささか意地の悪い諧謔に満ちており、まさにヘレニズムの遊びの世界に通じるものがある。それだけにその全貌は必ずしも一般に理解されていなかったような気もする。その意味でこの度、慶應義塾大学出版会から『西脇順三郎コレクション』が出版されることは、誠に喜ばしいことであり、とりわけ若い世代の読者たちにこの知的スリルをぜひ味わってほしいと願っている。



半世紀前の今日、ワシントンに監禁されていた父エヌラ・パウンドから、西脇順三郎の「京都の二月」が私のもとに届いた。それを伊訳して二九五九年に出版するように、とのことだった。

西脇をぜひ世に紹介したいという父の熱意は、西脇の詩稿のファクシミリと池田満寿夫の版画入りの豪華版をミラノのマルテ・エディチオーニから出すことにも貢献している。

これは一九七二年に刊行されて好評を博し、父も死ぬまえに一目見ることが出来た。

十年後に西脇の死の知らせを日本から受け、私は心から冥福を祈った。偉大な詩人たちはいつまでも忘れられることはない。かれらはひとびとを教え、喜ばせ、感動させ続けるだろう。今回、西脇順三郎の作品を集めて立派な選集を企画されたことに、深く敬意を表したい。

西脇順三郎の歩行が、遙かに、遠くなるうとして。柳田も折口も、大歩行者であったが、西脇には及ばない。茫々たる脳髓の歩行——灰色のムラサキの夢——タイフーンの舌や瞳の長嘯（ながなげ）。あるいは、太古、ギリシャ語と中国語が交通していた、晩年の西脇の洗つても洗つても消えやうとはしない、白葡萄酒の沁の夢もまた、大歩行の路傍のエメであった。小千谷の信濃川の岩間から滲み出た水霊（みづたま）。考える水の足音が、……静かに、遠くまで行こうとして。